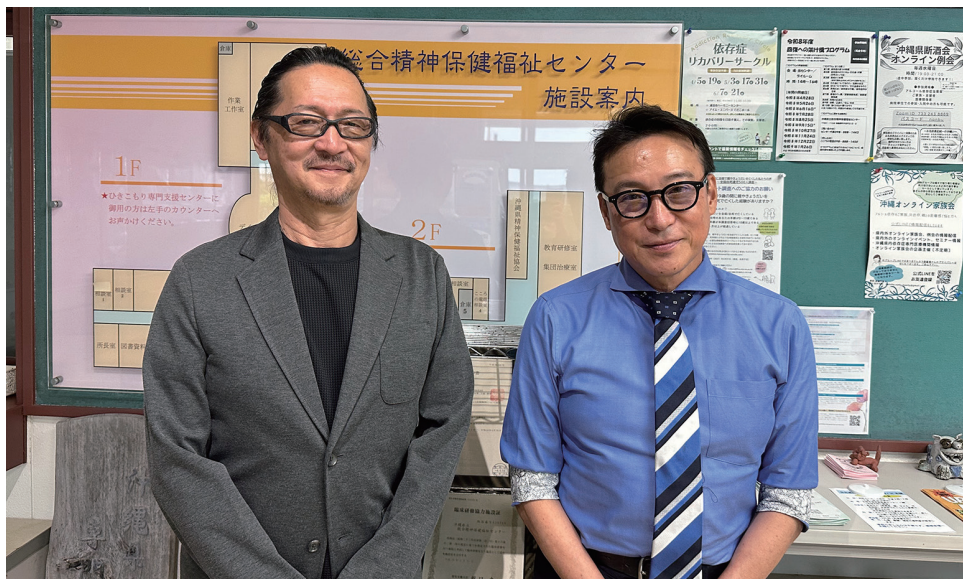


## 沖縄県立総合精神保健福祉センター 所長 牧志 倫 先生



広報委員 稲富 仁 先生

沖縄県立総合精神保健福祉センター 所長 牧志 倫 先生

稲富先生> 先生は、2025年4月から沖縄県立総合精神保健福祉センター所長にご就任されております。遅ればせながらご就任おめでとうございます。

2025年のご就任から1年が経過しました。この間を振り返って、特に印象に残っている出来事や今後の展望についてお聞かせください。

牧志先生> 私はこれまで長く臨床の現場に携わってきましたが、行政職に就くのは今回が初めての経験でした。この1年は、まさにすべてが初めての連続で、慌ただしく過ぎていったように感じています。

ようやく1年が経ち、少しずつ余裕を持って仕事に向き合えるようになってきた一方で、難しさを感じる場面も多く、自分なりに試行錯誤しながら取り組んでいるところです。

印象に残っていることとしては、11月に開催された精神保健普及大会があります。今回は

「楽しく高齢社会を生きる」をテーマに開催いたしました。その中の公開座談会で「高齢化社会を楽しく生きるヒント」というテーマで様々な立場で高齢者と関わっている関係者とお話をさせていただきました。シンポジストとして会の運営に携わるという経験はこれまでになく、大変勉強になりました。

また、精神科救急医療責任者等連絡会議では、さまざまな職種の方々と意見を交わしながら、現場の声を生かし、より良い精神科救急医療体制づくりについて議論しています。そうした会議を取りまとめる役割も、私にとっては新しい経験であり、多くの学びと刺激を得た1年だったと感じています。

こうして業務に取り組んでいるのも、支えてくださる精神保健福祉センターの職員の方々のおかげです。会の運営や研修会の企画など、多くの場面で優秀な職員の方々に助けていただいております。私はその後押しをしているような感覚です。

まだまだ学ぶことは多いですが、今後も現場の経験を生かしながら、より良い取り組みにつなげていきたいと考えています。

**稲富先生>** 牧志先生は、当院（糸満晴明病院）でも長年勤務していただいておりますが、先生のごことはよく知っているつもりではありますが、今回こうして行政の立場になられて、臨床を1年ほど離れた中で、改めて「臨床に戻りたい」と感じることはありますか。

**牧志先生>** そうですね。長年携わってきて慣れ親しんだ仕事でもありますので、臨床現場や患者さんとのやり取りを懐かしく感じることはありますね。

ただ、今は与えられた立場・職責の中で、自分にできることを精一杯務めることを第一に考えています。また機会があれば、そういった形で臨床に関わることもできればいいなと思っています。

**稲富先生>** 時々、会議等で牧志先生が仕切られているのを私も拝見させてもらっていますので、是非頑張ってくださいと思います。

センター長という立場も、歴代を見ていると何十年も務められた先生もいれば、1年ほどで退任された先生もいらっしゃいますね。

今後のご自身の展望や、どのように関わっていきたくかといったお考えはありますか。

**牧志先生>** そうですね、まだはっきりと決めているわけではない部分もあります。定年については行政職と同様で、管理職としては65歳までという形になりますので、あと5～6年ほどは務めることができます。

ただ、沖縄の精神科医療を取り巻く状況や、今後の方向性によっても変わってくる部分はあると思っています。そうした流れを見ながら、自分にできる役割を考えていきたいですね。

**稲富先生>** 1年間を振り返ってみて、今後センター長として取り組んでいきたいことや、



ビジョンのようなものがあれば、ぜひお聞かせください。

**牧志先生>** そうですね。引き続き現在の沖縄の精神科医療に関する課題に取り組んでいきたいと思っています。

依存症の問題やひきこもりの問題など、今なおさまざまな課題がありますので、そこにしっかり向き合っていきたいですね。

また、今年度からは県医師会の「おきなわ津梁ネットワーク」を活用し、医療保護入院者の入院届、入院期間更新届、退院届、措置入院者の定期病状報告書、などをDX化して申請する取り組みも始まります。これは全国でも初めての試みで、県医師会が長年にわたりネットワークを維持してこられたからこそ実現できたものだと思います。

今後は、紙で運用しているものを徐々にデジタル化していく流れは避けられませんが、人手不足への対応という意味でも、効率化は重要な課題です。その一つとして、入院届等のDX化を進めていきたいと考えています。おきなわ津梁ネットワークを活用することで、今後さらにさまざまな展開ができる可能性がありますので、ぜひこの取り組みを成功させ、広げていけたらと思っています。

**稲富先生>** ひきこもり支援や依存症対策、災害時のこころのケアなど、本当に幅広い業務に取り組まれていますよね。

これまであまり関わりのなかった分野にも携わることが増えたと思いますが、DX 以外の部分で、これから取り組みたいこと等がありますか。

**牧志先生** > 月に1～2回ほど、当センターで企画して、様々なところで教育研修や会議・技術支援を行っております。例えば、「かかりつけ医等心の健康対応力向上研修」については、医師会にもご協力いただきながら実施している事業の一つです。昨年度は加藤隆弘先生（北海道大学大学院医学研究院 精神科医学教室 主任教授）を講師にお招きし、「メンタルヘルスファーストエイドの医療福祉機関での活用について ～こども・若者のこころの SOS に寄り添う～」をテーマにご講演をいただき、50名近い先生方にご参加いただきました。おかげさまで大変好評を得ることができました。今年度は特定医療法人 社団 慈藻会 院長・理事長 傳田健三先生を講師にお招きして、思春期のうつや自殺予防などについてご講演をしていただく予定です。一般内科や小児科の先生方にも、とても勉強になる内容になるよう職員一同準備をして参ります。今年度も Web 参加を含めて実施予定ですので、ぜひ多くの先生方に参加していただければと思っています。

また、依存症に関しては、来年2月に「アディクションフォーラム」も開催致します。今回は、依存症治療や自殺対策の分野で著名な松本俊彦先生をお招きしてお話いただく予定です。一般の方も含め、幅広い方々にご参加いただきたいと考えています。

当センターで行っている相談内容としてはアルコール関連が多いですが、若年層の大麻使用や違法薬物など、新たな問題も少しずつ出てきています。

最近話題になっている、エトミデートいわゆる“ゾンビタバコ”のような問題も含め、時代とともに課題も変化してきています。

また、ひきこもり支援や自殺対策、災害時のこころのケア（DPAT 関連）などについても、継続して研修や支援活動を行っています。今後も幅広い領域に取り組んでいきたいです。



**稲富先生** > 総合精神保健福祉センターが実際にどのような業務を行っているのか、一般の先生方にはなかなか見えにくい部分もあるかと思っています。ぜひ今回の紙面を通して、その役割についても知っていただければと思います。

**牧志先生** > センターでは現在、職員が28名在籍しており、大きく「総務法定班」と「相談指導班」の2つに分かれて業務を行っています。

総務法定班では、庶務・経理などの管理業務に加えて、精神科医療に関する法的な手続きや審査に関する業務を担っています。例えば、「精神医療審査会」の事務局業務があります。これは、精神科医療が適切に行われているかを専門家が審査する仕組みで、医療保護入院などの入院手続きが適切か、あるいは患者さんからの退院請求に対して適切な医療が提供されているかなどを確認しています。

**稲富先生** > 非自発的な入院もありますので、患者の権利擁護という観点からも非常に重要な役割になりますよね。

**牧志先生** > 本当にそうですね。

また、精神障害者保健福祉手帳の等級判定や、精神科自立支援医療制度に関する判定業務なども行っています。きちんと精神科医療が提供されているのか、公費負担医療として適切かどうか等を、公平性を保ちながら審査しているところです。

一方、相談指導班では、先ほどお話ししたような各種研修会や普及啓発事業、依存症対策、ひきこもり支援、自殺対策、災害時のこころのケアなど、さまざまな事業を企画・実施しています。県全体の精神科医療を支える、いわば“下支え”のような役割を担っているのかなと思います。

**稲富先生>** ぜひリーダーシップを持って沖縄の精神科医療を引っ張っていただきたいと思いますね。

**牧志先生>** ありがとうございます。

私自身、まだ学ぶことも多いですが、限られた予算や体制の中で、どう地域の精神科医療をより良くしていけるかを考えながら取り組んでいきたいと思っています。

**稲富先生>** センターでは、県内の医療機関とどの様な関わりがあるか教えてください。

**牧志先生>** 医療機関やクリニック、病院との関わりは非常に多いですね。

例えば、自立支援医療や精神障害者保健福祉手帳に関する申請書類を各医療機関から提出していただき、それをこちらで審査しています。その中で、内容に確認が必要な場合には、こちらから問い合わせを行うこともありますし、病院に関しては、医療保護入院などの入院届に関する審査・確認などのやり取りもあります。

また、患者さんから退院請求があった場合に

は、実際に病院へ伺い、患者さん本人やご家族、主治医の先生からお話を聞いたうえで審査を行うこともあります。そういった意味では、さまざまな場面で医療機関と関わっていますね。

さらに、各種研修会や講演会も企画していますので、県内の医療機関へ広報を行い、ご参加いただいています。こちらから医療機関へ出向くこともありますし、逆にセンターへ来ていただくこともあります。

**稲富先生>** 本当に幅広い業務ですね。その中で、特に大変だと感じる部分はありますか。

**牧志先生>** やはり時間との戦いという部分はありますね。

特に、精神科自立支援医療や精神障害者保健福祉手帳の判定件数は年々増加しています。

認知症関連の申請も増えていきますし、発達特性のあるお子さんに関する申請も増えてきますので、限られた時間の中で審査を進めていくのはなかなか大変です。

**稲富先生>** やはり書類の多さでしょうか。

**牧志先生>** そうですね。書類量はかなり多いです。

そのため、DX化を進めて効率化できる部分は進めていきたいと考えています。

現在はまず入院届のDX化に取り組んでいますが、今後さらに広げていければと思っています。

班等の分掌事務（出先機関）

機関名：総合精神保健福祉センター

班等名	分掌事務	班等名	分掌事務
総務法定班	1 庶務・経理等の管理事務に関する事。	相談指導班	1 精神保健福祉相談、診療に関する事。
	2 精神医療審査会事務及び退院請求等に関する事。		2 精神保健福祉従事者に対する教育研修に関する事。
	3 精神保健及び精神障害者の福祉に関する法律第45条第1項の申請に対する決定を行う事。		3 保健所及び関係機関等に対する技術援助に関する事。
	4 障害者総合支援法第52条第1項に基づく認定事務のうち、専門的な知識及び技術を必要とするものを行う事。		4 精神保健福祉知識の普及啓発に関する事。
	5 障害者総合支援法第22条第2項又は第51条の7第2項の規定により、市町村が同法第22条第1項又は第51条の7第1項の支給の要否の決定を行うに当たり意見を述べること。		5 ショートケア、地域移行・地域定着支援事業等、精神保健に課題を抱える者にも対応した支援に関する事。
	6 診療報酬請求に関する事。		6 ひきこもり専門支援センターの運営に関する事。
	7 精神保健福祉統計に関する事。		7 依存症対策に関する事。
	8 医療法関係の届出に関する事。		8 自殺対策に関する事。
	9 庁舎の使用及び管理に関する事。		9 災害派遣精神医療チーム(DPAT)体制整備に関する事。
			10 精神科救急医療情報センターに関する事。
			11 精神保健福祉関係者の協議会、ネットワークに関する事。
			12 心身喪失状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する事。
			13 家族会、患者会、精神保健福祉関係団体等の組織育成に関する事。

稲富先生> 件数自体もかなり増えているのでしょうか。

牧志先生> ざっくりした数字にはなりますが、昨年度の自立支援医療の承認件数は年間約5万6,700件でした。精神障害者保健福祉手帳は約1万2,600件で、ここ10年でおおよそ1.4倍程度に増えています。右肩上がりが増加している状況ですね。

稲富先生> 10年前と比べると、手書きの書類はかなり減りましたので、その点は読みやすくなっていますよね。

牧志先生> 今でも一部手書きはありますが、以前に比べればかなり改善されています。

とはいえ、件数そのものが非常に多いので、審査が終わればまた次の審査、という形で業務が続いていきます。

稲富先生> 今後、件数が減る見込みはありますか。

牧志先生> 現状では、しばらくは増加傾向が続くのではないかと思っています。その状況に対応できる体制づくりを進めていきたいですね。

稲富先生> 先ほど、県医師会の「おきなわ津梁ネットワーク」のお話もありましたが、県医師会に対して何かご意見やご要望、「こういうことをしてほしい」といったことはありますか。

牧志先生> 本当に今回、おきなわ津梁ネットワークを活用させていただき、DX化の取り組みを進められることに感謝しています。

他県では、ネットワークを構築しても維持が難しいケースが多い中、沖縄県医師会が長年しっかり維持してこられたからこそ、今回のような全国初の取り組みにつながったと思っています。そういった意味でも、このネットワークにはまだまだ多くの可能性があると思っていますので、今後さらにさまざまな形で活用が広

がっていけばいいなと思っています。

また、精神科医療や精神保健福祉の分野は、病院だけでなく地域のクリニックの先生方を含め、医師会の先生方のご協力があって成り立っている部分が非常に大きいと感じています。引き続き、ご理解とご協力をお願いしたいですね。

今後もDXを含め医療を取り巻く環境はどんどん変わっていくはずですが、この時代の大きな変わり目の風を、その時々で感じながら医師会の皆さんと一緒に乗り切っていきたいですね。

稲富先生> プライベートの話になりますが、牧志先生といえば、水泳やマラソンを長年続けていらっしゃる印象がありますが、最近はいかがですか。

牧志先生> 今も続けていますよ。今週末も軽井沢でハーフマラソンを走る予定です。

去年は尚巴志ハーフマラソンも出ました。早起きし過ぎて現地入りしたので、会場で寝てしまい、インタビューされてテレビで寝顔を放送されてしまいました。(苦笑) タイムは確か2時間40分くらいだったと思います。さすがに坂道は歩きましたけどね。

稲富先生> 以前はもっと速かったですよね。

牧志先生> そうですね。以前はもう少し走れていました。普通に走ってハーフは軽く2時間は切っていました。ただ、年齢も重ねていますので、今は無理せず続けることを大事にしています。

水泳はプールで泳ぐことが多いです。でもコロナ禍の時どこも行くところがなくて、海に近い自宅を散歩していたら、「ここで泳げばいい。」って思って泳いだらすごくよくて(笑)

地元を見直すきっかけになりました。

天気の良い日に海へ行って泳ぐと、すごく気持ちがいいんですよ。今でも時々、思い出したように海へ行って夕日を見ながら、小さい魚につつかれながら泳いでいます。そういった時間が、いいストレス解消になっていますね。

あとは、飛行機は昔から好きですね。特に

JAL が好きで、出張の時もよく利用しています。飛行機そのもののフォルムや、空港の雰囲気が好きなんです。新しい場所に行くワクワク感がいいんでしょうね。でも那覇空港に戻った時はやっぱり自宅が一番！って思っちゃいます（笑）もともとはパイロットに憧れていた時期もありました。ただ、視力の問題もあって、その道には進めませんでした。今でも飛行機に乗るとワクワクしますね。

以前は、飛行機に乗ること自体を目的に、どこかへ行ってそのまま帰ってくる、なんてこともしていました（笑）

**稲富先生**＞ これまで知っていた牧志先生のライフスタイルは、あまり変わっていませんね。

**牧志先生**＞ そうですね。気に入ったことはずっと続けるタイプかもしれません。

**稲富先生**＞ そういえば、昭和のアイドルも好きでしたね。

**牧志先生**＞ はい。松田聖子さんが好きなんです。世代です。コンサートにもディナーショーにも行ったことがあります。

今は忙しくてなかなか難しいですが、機会があればまた行きたいですね。去年の紅白を見ても、「頑張っているなあ」と思いますし、こちらにも励まされます。長年第一線で活躍されている姿を見ると、自分も頑張ろうと思いますね。

**稲富先生**＞ 立場が変わっても、牧志先生らしさは変わりませんね。

最後に、座右の銘や大切にしている言葉があれば教えてください。

**牧志先生**＞ 特別な言葉があるわけではないのですが、私はどちらかというと、毎日コツコツ積み重ねていくタイプなんです。

大学時代にとっても勉強のできる人がいて、「どうしてそんなに覚えられるの？」と聞いたことがありました。



## PROFILE

### 略歴

平成 12 年 琉球大学医学部医学科卒  
 琉球大学精神科入局  
 新垣病院  
 糸満晴明病院  
 県立宮古病院  
 県立精和病院 等勤務

令和 6 年 県立精和病院副院長  
 令和 7 年 4 月より現職

### 資格

精神保健指定医  
 精神科専門医・指導医  
 日本医師会認定産業医

### 所属学会

日本精神神経学会  
 日本司法精神医学会

すると、「一つ覚えられたと思ったら、それで十分と思っている」と言っていて、それがすごく印象に残っているんです。全部完璧にやろうとするのではなく、一つでも何か学びや発見があれば、それでいい。そんなふうに考えながら、日々取り組むことを心がけています。

**稲富先生**＞ いいお話を聞かせていただきありがとうございます。

本日はお忙しい中、ありがとうございます。

インタビューアー：広報委員 稲富 仁